

第 20 回環境 NPO リーダー海外研修 報告書

Climate Youth Japan

廣岡睦

1. 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本の NPO として生かせるか。

(1) 「一緒にやる」というネットワークの作り方

初日に訪問したラインランド・ファルツ州環境省環境情報センターで、シュターデン氏がラインランド・ファルツ州には、「簡単にやろうじゃないか」というモットーがあると仰っていたことが印象的でした。ライン川の水質汚染問題の様に、ドイツ国内の州同士が協力するだけでなく、国境までも越えて4カ国で1つの環境問題に取り組んでいる姿勢に驚きました。

また、データバンクファンドレイジングの特別講義において、ファンドレイジングのために最低でも全体予算の1%を投資することが必要と学びました。その際、講師のヘルゲ氏より「小さな団体でそれぞれファンドレイザーを雇うのではなく、なぜみんなと一緒に一人を雇わないの？」と問われたことに、とても納得しました。

小さな NPO が個別に対応するのではなくて、分野・地域を越えてみんな同じ市民という立場と自主性を大切にしながら、行政・NPO 間でお互いの強みを補い合って協働することの可能性と必要性を強く感じました。

(2) 徹底的な顧客目線

ドイツ自然保護連盟（以下、NABU）や GRKW では、毎年 11 月頃には次年分 1 年間のイベントや講座などをまとめた「年間スケジュール」を作成して配布していました。日本国内でも、ざっくりと「〇月頃に×を行う」程度の予定を入れている団体は多く見かけますが、NABU・GRKW 共に日時と場所、イベント内容までも詳細に記載されていたので驚きました。

NABU ラインヘッセン地域担当の広報官で、年間スケジュール作成も担当するミヒャルスキー氏は「1年間のイベント詳細を決めることはハードだし、なかなか情報が期限内には集まってこないから、作成は大変だ」と仰っていました。もちろん、1年以上先の予定を詳細まで落とし込むことは大変かもしれませんが、この取組みは間違いなく日本でもすぐに取り入れられます。イベントに来てくれる会員や市民が早めに興味のあるイベントを把握することで、NPO の顧客である「会員」の満足度が間違いなく上がると思います。

また、マインツ市環境情報センターを訪れた際にも、同様の学びがありました。この施

設は、マインツの中心市街地という好立地にあり、市民のゴミ分別などを促す情報発信や環境教育の拠点として、1999年から設置されている公的施設です。そこにゴミ分別について説明した資料が設置されていたのですが、何とアラビア語やペルシャ語を含めた14カ国もの言語に訳されており、驚きました。日本国内を想像しても、英語や中国語、韓国語は地域によっては存在するかもしれませんが、なかなか日本語以外の多数言語に訳されている行政資料は少ないと感じます。

発信側視点ではなく、まずは情報を受け取る相手を想像し、その受け取り側が求めている情報は何か、彼らがキャッチしやすいようにするために発信方法はどのようなものかを、考えることの重要性に気づきました。

(3) 人が集まってくる仕組み

前述の、マインツ市環境情報センターの仕組みが印象に残っています。当施設は、環境に関する情報発信だけでなく、ゴミ出しで使用するゴミ袋の配布や、家庭では処理できない特殊ゴミ（例えば、電池やワインのコルク、小型家電、カートリッジなど）の回収拠点という役割もあります。そのため、全く環境について興味がない市民も、日々の生活を送る上で必要なゴミ出しのために、必ず定期的に当施設に来るということでした。平日午後2時間程滞在してお話を伺いましたが、その間にも10名ほどの市民が訪れ、ゴミ袋を入手したり特殊ゴミを分別したりするだけでなく、施設内に置かれているパンフレットや展示物を見ていく姿がありました。また、最終日に再度見学に訪れた際は、オープン時間の10時前には何名か市民が扉の前で待っていて、驚きました。

日本にも情報発信を目的にした施設やコーナーがありますが、「環境に興味がある人が情報を取りにくる場所」となっており、そもそもの目的である「全ての市民に環境のことを知ってもらい興味を持ってもらう」という目的が達成できない状況にある施設が、全国にあると思います。市民が“必ず行かざるを得ない”仕組みが取り入れられないか、見直しができると思います。

2. 研修を通して、日本の環境NPO活動を支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

情報共有だけでなく、“実際に共にやっていくネットワーク”を作ることが重要だと感じます。その手法として、以下の3点が必要だと考えます。

(1) FOJ制度の導入

過去の参加者報告書にも書かれていましたが、やはり私もFOJ制度の導入が必要だと思

います。①1年間フルタイムで働きながら、②自分の意思（自由意志）でそれぞれの興味を見つけ、③環境 NPO 業界に就職してくれる若者を育成するという基本姿勢を大切に、研修受け入れ先がお金を出し合ってコーディネーターを雇い、長期的な人材育成に投資をしていく仕組みを提案します。

理由は、ドイツ全体で実施されている「環境ボランティア研修制度（以下、FOJ）」に感動したからです。今回の研修中にたくさんの団体を訪れましたが、どこの団体・施設に行っても必ずと言っていいほど FOJ 生が研修をしていました。同制度は、16 歳～26 歳までの若者が月 150€のお小遣いを受け取りながら、約 1 年間を通して環境団体や施設、農家で働き、将来どのような仕事に就くのかを見つける“人材育成”の制度です。ドイツ全土で実施されていますが、州によって受け入れ先や細かな仕組みは異なります。今回は、ヘッセン州の事務局で研修施設と FOJ 生をマッチングしたり FOJ 生の相談にのったりするコーディネーターを行う Ulrike さんにお話をお伺いしました。「若者たちの考えやアイデアが面白い刺激になっている」と、若者の成長を見守る Ulrike さんの情熱が伝わってきました。

日本にも大学生による環境 NPO へのインターンシップ制度がありますが、期間が短かったり体験できることが日々の業務の雑用だったり、なかなか環境 NPO の面白さや将来の働き方を考えてもらえる機会になっていないと感じています。また、団体ごとに取り入れようとしても、小さな団体の場合はインターン生の研修などに割ける時間が極めて少ない状況です。今回の研修に応募した際に「日本の環境市民活動を活性化させるために何が必要か」という質問に、「10 年・20 年先を見据えた若手の育成」と書きました。ドイツ研修を終えた今、一層この未来への投資の重要性を感じています。

（2）NABU・BUND の様な戦略的に発揮する数の力

日本中の環境 NPO の力を集約して、社会を変えるネットワーク組織を作り上げることを提案します。

ドイツ環境保護連盟（以下、BUND）や先述の NABU は、ドイツが誇る 2 代環境 NPO です。この 2 団体の強みは、間違いなくその圧倒的会員数ですが、それぞれ独立した人格を持つ地域グループ・州支部・ドイツ連邦のグループに分かれ、民主的にボトムアップで運営していることで、成り立っています。また、生物多様性と気候変動をそれぞれの団体が共に扱っており、団体として揺るぎない共有目的を持ちつつ、広く環境問題をとらえているからこそ賛同者も多く、色んなアプローチが可能になっていると考えます。

日本でも環境 NPO 間のネットワークはありますが、ドイツの様な会員 50 万人を越えるという驚異的な数値を見せられる、“社会を変える”ネットワーク組織はありません。しかし、過去に本研修に参加したメンバーが集う「日本環境 NPO ネットワーク」には、環境問

題の中でも分野・世代を越えた社会を変えるリーダーたちが既に集っており、土壌はあると改めて気づきました。それぞれが持つ“数”をスイミーの様に集約して、大きな魚にも向かっていくことは可能だと思います。各団体としてそれぞれ独立しながらも、全体で意思決定をして社会を変えるアプローチをし、多くの人を巻き込み、文化を作って社会を変えていく力を環境 NPO が持つ事が重要だと考えます。

3. 全体を通しての感想

(1) 今回の研修で学んだこと

①相手の立場に立って考えること

* 会員へのサービス、どうしてももらえると嬉しいのかを想像する力

* 相手を大切にしているということを表現することの重要性と、表現の方法の多様性

②視点を長くも短くも、見る角度を常に柔軟に変えられる力

* 活動の成果や問題の解決への変化が見えにくい状況でも、前を向き小さな成果を見逃さず確実に進んでいるという実感を持つ視野

* 問題の本質はどこにあるのかを見抜く力

③共通のゴールを持つことの重要性

* 一人一人、各団体での力は小さくても集まって一緒に共通のゴールを目指すこと
力強さ

* 共通目的の達成に向けて、行政・国・地域・NPO・企業なども win-win で補い合える可能性

(2) 感想

今回の研修初日に、「リーダーとはどういう人か？」という問いに対して「メンバーに向き合い続ける人」と答えました。その質問を、研修を通して問い続けていました。今は「本物であり続ける人」という言葉が頭に残っています。熱い情熱と未来を見据えるポジティブなマインドを持ち、忍耐強くひたむきに、そして常に好奇心を持った純粋な人にこそ、人は共感して「一緒に何かやりたい!」「あなたが言うのだったら」と感動するのだと思います。真摯に問題と向き合い、取組み続けることの大切さと力強さを学びました。今までやってきたことは間違いじゃなかったと実感できたと共に、今後も情熱を持って仲間と一緒に気候変動問題と向き合っていこうという勇気をもらいました。

今回、この研修に参加できた私は、本当に恵まれていると感じます。全国のセブン-イレブンの店頭で募金をしてくださったみなさまに感謝すると共に、素晴らしい研修をコーディネートして私にチャンスをくださったセブン-イレブン記念財団のみなさまに、心から感

謝いたします。今回、私に“投資”してくださった分は、必ず行動でお返しいたします。

最後になりましたが、20期のみなさま本当にありがとうございました。深い学びの時間を共に過ごせて、とても有意義で幸せな時間でした。